

熊本学園大学 機関リポジトリ

## 教職をめざす学生諸君へ：教職はおとなの仕事

著者	岩永 久次
雑誌名	社会関係研究
巻	6
号	1・2
ページ	1-30
発行年	2000-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1113/00000445/">http://id.nii.ac.jp/1113/00000445/</a>

## 『教職をめざす学生諸君へ……教職はおとなの仕事』

岩 永 久 次

皆さん、こんにちは。

ここには講演と書いてありますが、講演と講義とどう違うか分かりません。私は講義のつもりで話します。

これまでは、短い話ばかりしてきましたけれど、今日はたっぷり時間がありますから、ひょっとすると予定の時間をオーバーするかも知れません。もし、質問などあれば、時間無制限でいきたいと思います。

いま、お話がありましたように、私は3月で定年退職します。68歳です。昭和40年4月にこの大学にきましたから、これまで34年間。ここに来る前に高校で4年、それから3年間大学に戻って研究室の助手をしておりまして、それをひっくると41年間、教員生活をしてきました。

いろんなことがありました。楽しかったこと、悲しかったこと、腹が立ったこと、辞めようと思ったことなどなど、いろいろありました。その中のどれかを今日の話題にしたかったんだけど、そうになると、あれもこれもとなって收拾がつきませんので、一度は話しておきたいと思いながら、とうとう授業のなかでは話さなかったことで、私が日頃こだわってきたことを話したいと思います。「教職はおとなの仕事」というタイトルはまずかったかも知れませんが、話の最後に「あーこういうことか」と気付いてくれれば結構です。プリントが配られたと思います。話の大筋は、そのプリントに書いてあるような流れでいきたいと思います。それじゃ本題に入ります。

言うまでもありませんが、今、教育界は大混乱に陥っています。日本ばか

りではなく、諸外国、先進国から発展途上国までの多くの国々が教育問題に振り回されています。そのなかで興味ぶかいというか、気になるのは、アメリカやイギリスという先進国が日本の教育に注目して、「日本を見よ、日本の教育を見習え」としきりに言っていることです。

アメリカではレーガン大統領の時に、「教育の優秀性に関する全米審議会」を設けて、1983年に『危機に立つ国家』という報告書を出しましたが、そのなかで、日本の教育に対する挑戦状とも受け取れるような提言をしています。「今やアメリカの教育のやり方では、国民の学力はつかない。すでに日本に大きく遅れをとっている。学力の遅れは国力の遅れにつながる」「日本の初等・中等教育の大きな成果は、すぐれたエリートをつくり出した点にあるのではない。国民能力の高度な平均的水準を生みだした点にある」と言い、「日本を見よ」と繰り返し述べています。

イギリスでは1988年に教育改革法が出され、画期的な教育改革を推し進めています。改革の柱は、日本の教育との比較で、「日本の経済の成功は、教育の成功がもたらしたものである」「日本の教育は、小・中学校は、文部省の強い統制のもと、画一的な共通の教育を効率的に行って質が高い。高等学校では学校が競い合って質を高めている」と述べ、日本の学習指導要領をモデルにして、ナショナル・カリキュラムをつくり実施せよと、学校当局に押しつけるところまで至っています。「統制と競争」がイギリスの教育改革のキーワードとされ、教育の「ジャパニゼーション（日本化）」ということを行っています。

発展途上国の人たちは、しきりに日本の教育視察にきていますが、口を揃えて「日本の教育制度を自国の政策に取り入れたい」というふうに言っています。去年の夏、私はブラジルに行ってきました。そのとき、ブラジルから熊本に留学したことのある20人の青年たちに集ってもらい、「日本の教育はどうだったか」という話し合いをしたのですが、みんな「すごい」と言うんですね。「何がすごいのか」と聞くと、「一口には言えないが、とにかく立派」と。「何が一番印象的だったか」と言ったら、彼らは熊本のあちこちを

旅行してまわったようですが、「旅行してどこに行っても、立派な学校が建っている。そして、正規の免許を持った先生がどこにも配属されている。ブラジルとはずいぶん違う」と言っていました。

こうした諸外国が日本の教育をみるときに指標とするのは、義務教育の就学率の高さ 99.9%、高等学校進学率 95%、上級学校への進学率 45%、カリキュラムの密度の濃さ、教員資格制度の徹底、小・中学校の理科や算数の学力のレベルの高さ、そういうものから日本の教育に注目し、モデル視し、ライバル視しているわけです。

日本の教育が制度的によく整備され、効率よく機能している点が注目され、モデル視されているということは、非難されるよりはいいだろう。しかし、日本の中にいるものからすれば、誤解ではないかと思わずにはいられません。いじめ、登校拒否、校内暴力、自殺、試験地獄、最近では学級崩壊……教育の荒廃とか、教育の病理現象とか、毎日毎日頭を悩ましている我々には、「教育の日本化」は素直には聞こえません。むしろ不気味にさえ聞こえます。

わが国の教育の日の当たっている面、当たっていない面をじっと見つめてみると、問題、疑問がいっぱい出てきます。教育に先進国・後進国はあるのだろうか、教育の発展とはどういうことなのか、という疑問がつきまってきます。学校が整備され、校舎が立派で、カリキュラムがきちんと組まれ、免許を持った教員が配置され、カリキュラム通りに授業が行われていれば、それが教育の発展だろうか？ 学校に在籍する人口が高まることが教育の発展だろうか？ 私には「学校栄えて、教育減ぶ」という言葉が聞こえますが、どうでしょうか。

話の方向を修正します。教育界が混乱しているから教育論議が盛んです。公的にも私的にも、議論が多いということは良いことです。ああしなさい、こうしなさい、あれじゃいかん、これじゃいかん……と、論じ合うのは結構なことです。だが、これほど盛んな教育論議に一つの疑問があります。そのことが今日の話のポイントなのですが、それは「おとな不在」の教育論議で

はないかということです。はじめに私が日頃こだわっている問題といったのは、実はこのことでした。少し突っ込んで考えてみましょう。

教育とは、幼児を少年に育て、少年を青年に育てることですね。そこまではいいですが、青年に育てた、その後はどこへいくのか？ 青年にまで育てたらそれでおしまいかな？ 教育の目標は、幼児を少年に、少年を青年に育てて、そして青年を「おとな」にまで育てあげることではないか。私はそう思うけれども、いまの教育論議では、「おとなになる」ということが自明のことであるかのように、誰も論じない。

幼児期の教育論、少年期の教育論、青年に対する教育論、これらのことについては、本屋さんに行けばよくわかる。いわゆる教育書がところ狭しと並んでいます。膨大な予算を組んで調査された青少年に関する「教育資料」の類も少なくありません。

幼いときにはこういう基本的な仕付けをせにゃいかん、子どもの体ができてきたらこういうふうに鍛えて行くこと、少年の反抗期になったらこういう指導が大切だ、性に目覚めたらこんなことを注意せにゃいかん、というようなことについて、いわゆる「How to」もの、子育ての「How to」ものは氾濫しているんです。幼児を少年に育て、少年を青年に育てて、そしてどうするのか？ そっから先はもういいのか？ 青年から先の（いわば教育＝子育ての目標地）のことについては、問わなくてもよいというのだろうか？ 私にはこの点がわからない。

ひょっとすると、諸君は「成人学級とかカルチャーセンターなどで、おとなも勉強しているではないか」とか、「生涯教育が勧められているではないか」などと言うかもしれません。私のいう「おとな不在」とは、そんな「おとなよ頑張れ」「おとながしっかりしなければ駄目だ」というようなことではありません。「おとな像」そのものが問われないということです。

フランスにブーグレという社会学者がいました。そのブーグレという人は「教育というのは、文化の糸つなぎだ」と言いました。原文は次のようです。「……あらゆる進歩の第一条件が常に伝統である所以がそこにある。社

会は失った土地を取り戻し、炬火の新しい持ち手を新たに徴募しようと絶えず関心している。生と死の二重の法則が社会に絶えざる自己再生を必要ならしめている。ひとが死ぬ度毎に、集合的持続の条件である伝統の糸が謂わば切断される。ひとが生まれる度毎に、その糸を再び結ばねばならぬ。生命のもたらし来る新しい存在を社会的存在となさねばならぬ。」（『社会学的にみた価値の進化』 創元文庫）つまりこういうことです。我々は死んでいくが、我々が死ねば、我々が身に付けてきた文化も一緒に死ぬ。文化は遺伝しないからだ。文化が死ねば歴史はつながらない。つながらないから、次の世代のものに、文化を糸でつなげなければならない。その糸つなぎが教育の仕事だ、というふうに言っているのです。

私ももうすぐ死にますが、教育というのは、人間が死ぬからあるんですよね。死んでいくときに、次の世代の人に文化のバトンタッチをせねばならん。誰にでもバトンタッチしてよいのか？ そうではあるまい。バトンタッチして、「後を頼んだぞ」と頼むに足りる人にしか、バトンタッチしてはいけない。そうしないと歴史がゆがむ。したがって、やがて死んでいく「おとな」は、後事を託するに足る青年（次代のおとな）を育て、そのものたちに文化の糸つなぎをして、安心して死んでいく。ここが一番重要なんじゃないかなー。なのに、何故そのことが問われないのだろうか？

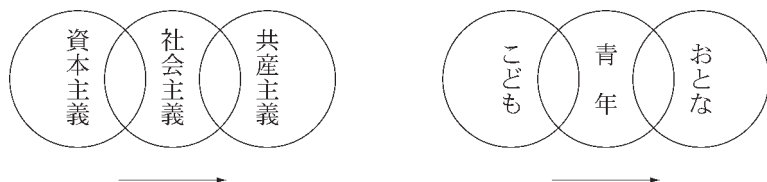
さて、幼児→少年→青年（ここで切れる！）という教育論を逆さまにしたらどうだろうか、というのが私の持論です。つまり、おとな→青年→少年→幼児という逆順です。

「おとな」というのが、まず問題になってきます。まず、歴史を支えていく「おとな」がいて、次の世代の「おとな」にふさわしい青年を育て、その頼もしい青年になってくれるように少年を育て、その少年になるためには幼い時からこんなことに注意して、というふうに逆コースを考えてみたい。今のうちに幼児、少年、青年、終わり、というのでは、私は教育論は組み立てられないと思いますが、どうでしょうか？

「おとな」、いま教育論議は多いけれど、親も教師も政治家も「おとなになる」「おとなである」ということは、もう分りきったことであるかのように、問わないで、そして「青年よ頑張れ、少年よひねくれるな、幼児よすすく育てよ」というのは、どういうことか。「おとなの条件」とは何なのか？「おとな不在の教育論」が問われなければならないんじゃないだろうか？と考えるのです。

今日帰ったら、辞書を引いて下さい。「おとな」とは？「おとな」とは、広辞苑でも広辞林でも構わない。「おとな」という項目を引いてごらん。一番ポピュラーな辞典「広辞苑」では、「おとな」とは、「十分成長した人、成熟した人」と書いてある。バカげた辞書には、「おとな」とは「大人らしい生き方のできる人」と書いてある。私は、これにずうっとこだわってきました。いままで私が読んだ本のなかで、一番詳しく書いてあったのは、発達心理学の辞書でしたが、それには、「おとな」とは、「身体的成熟、知的成熟、社会的成熟、情緒的成熟を遂げてバランスのとれている状態」と説明してあった。ホントかね？ 私は、身体的には成熟してしまった。知的には未熟。社会的には、まだわからないことが一杯ある。情緒的にはひねくれている。とても、私は、バランスがとれているとは思わん。「そうなら、お前は大人じゃない」と言われるなら、そうかもしれん。「成人」というのを引いてみると「満二十歳に達した人」と書いてある。「青年」というのを引いてみると「若い人」と書いてあった。「少年」を引くと「幼い者」と書いてある。なんば説明しとつとでしょうか、これは？

よく本にはこう書いてあります。「青年とは、片一方の足を子どもに残しながら、もう一方の足は大人に突込んで、やがて子どもから大人に移ってい



く過渡期である」というように書いてあります。この説明でいいでしょうか？

左の図と右の図は一緒です。現代経済学では通用しないだろうが、私たちが高校で教わったときの説明では、個人の私有財産と生産手段の私有を認め、自由競争の原則で成り立っていく「資本主義社会」というのがある。その反対の極に、生産力や生産関係は共有だという考え方に基づいて、計画経済を原則としている「共産主義社会」というのがある。その両方の要素を取り入れて、その間に「社会主義社会」がある。そして、歴史は「資本主義」から「社会主義」にいて、それから「共産主義」に移行するというのが、かつて私たちが学んだ経済社会の法則ということでした。この説明はよく分りました。なんで分ったかというと、「資本主義」とはこういうもの、「共産主義」とはこういうもの、と説明したから分る。ならば、「子ども」とはこういうもの、「おとな」とはこういうもの、ということが説明できるなら、この右の図も分るでしょう。

「子ども」とは何か？ 未熟です。何が未熟か？ 体の構造そのものが未熟、骨格構造が未熟、神経系統が未発達です。ホルモン分泌が未発達、未熟です。これでいいでしょう、これでいいですか？ ならば、こっち（おとな）は成熟か？ 「熟する」とはどういうことか？ 「成熟」とは、例えば、柿の種があって、芽がでて、大きな木になって、花が咲いて、実がなって、やがて青い実が黄色くなって、赤くなって、そして落ちる……これが「成熟」ということでしょう。さっき言った身体的成熟、知的成熟、社会的成熟、情緒的成熟は、それで説明できますか？ そんなことを言っていると、青年は「半熟」ということになる。君たちは「半熟」か？ 青年は「半熟」か？

私は、この「成熟」説では「おとな」を説明できんと思う。これで説明できんのなら、その一步手前の青年も説明できんと思う。さっきから言っているように、教育はここにいる子どもたちを、ここまで（おとなの地点まで）連れてくるという仕事じゃないのか？ 「おとな」にまで育てることが目標なのではないのか？ その「おとな」の説明ができないとは、どういうことか？ これが、私のいう「おとな不在」という問題です。



このことに、もう随分昔からこだわり続けてきました。これが分らないなら、教育のことは分かんと思ってきました。そのことにこだわってきました。日本の歴史が今までずっと続いてきたということは、はっきりとした「おとな」がおって、その「おとな」から若者へのバトンタッチができてきたからだ。歴史がつながってきたというのは、そういうことだ。だから、今はボケてしまっているけど、そうでなかった時代があった筈だ。そう思い続けて、これまで、あっちこっち調査に行きました。そうしたら、だんだん分ってきました。次のようなことです。

私たちの祖父母の時代まで、地域によってはつい最近まで、子どもが幼→少→青と育っていく過程で、ある一線を越える、その一線を越えた先が「おとな」という、そこに、「一人前の基準」というものがありました。観念論じゃないですよ。極めて具体的にありました。熊本では「一人前」、天草では「ヒトイマテ」、半人前のことを「ハンマテ」と言いました。この基準は、大きく分けると二つになります。一つは、労働能力の一人前。「お前は～の仕事ができるか」という物差しがあって、その物差しにかなえば「一人前」というふうに認められました。もう一つの基準は社会的能力の一人前。ちょっと適確さを欠く言葉ですが、要するに、これは、人間関係を維持していくのに必要な能力、例えば言葉遣い、礼儀作法、共感の能力、モラルの感覚などなどです。（このことについては、後で詳しく検討します）

諸君は農業離れしとるから、こんなことを言ったってピンとこないかもしれないけれども、例えば、熊本から南へ、川尻、宇土、松橋、小川、有佐、千丁、八代と、農業地域が開けていますが、その松橋町の曲野というところで、青年団の大正時代の日誌を見ていたら、当時の青年たちが若者宿に泊まり込んで、「おとな」になるために一生懸命、自分たちで頑張った記録がありました。その中に「目標記録」というのがあって、「草刈りは朝飯前に三駄」とありました。草刈りについての「一人前」ですね。「私は草刈りが出来ます」と言う以上は、朝起きて飯食う前に、鎌一つ持って行って三駄。一駄というのは馬の背中にいっぺん分ということですね。三駄は馬の背中に三ばい

分。それだけの草を刈ってきて、それから朝飯を食う。それが平気で出来なければ、「お前は草刈り一つできんのか」と言われたのです。「畦塗り 45 間」、畦塗りって知っていますか？ 田圃の水が漏れないように、ずうっと泥で塗り固めていかにやらん。これは大変きつい仕事ですよ。中腰になって、鍬で泥を、水気のたっぷり含まった泥を、こうして畦道に塗り付けて、それをトントン叩いて、固めていかにやいかん。それを 45 間。メートルに直すとどれくらいになるだろう。一日で、一人の男が「畦塗りは出来る」と言う以上は、45 間の長さを一人でしきりにやらぬ。「田植えは 4～5 俵どり」。「田植えは出来ます」と言う以上は、4 俵か 5 俵の米が取れるくらいの面積を、一人で仕切れなければならない。まだまだ一杯ありますよ。「草鞋は夜なべに 3 足」。「草鞋を作ることが出来る」というのは、一日の仕事が終わった後、晩飯の後、囲炉裏に火を焚いて、お湯を沸かしたり煮物をしたりしながら、その周りにずうっと座って、そして雑談しながら、今日一日のことなど話しながら、手では草鞋を作っていく。それが夜なべ仕事。その夜なべ仕事として、一晩に三足作りきらないと、「草鞋を作れる」とは言えなかったんですね。そんなのを「一日役」と言いました。

矢部町の国有林で働く人たちの「一人前」を調べに行ったときの事です。ちょうど大きな木を切り倒すところでした。「今から、この木を切り倒す。この木はこっちに倒れる。そのあたりに働いているものが何人かいるが、『危ないから避難せよ』と呼び掛けにやらん。あんたが危ないと思う危険区域は、どこからどこまでか？」と問われた。だから私は、木の高さをにらみ、横幅を見ながら「ここらへんでしょうかー」と答えました。そしたら、「4～5 人殺すぞ」と言われました。「どうしてですか？」「よう木ば見なさい」「木は見ました。高さも検討しましたが、これぐらいじゃないですか？ ならばこれぐらいですか？」と少し広く言ったのですが、「まだ危ない」と。そしてその人はこう言ったのです。「ここに枝があるだろう。あそこには小さな木が何本かある。この大きな木が倒れていくと、この枝があの子木を引き倒す。うえの枝があの子木にからむ。これは、こっちに倒れる、あれは、あ

れを引っ掛けてあっちに倒れる。だから、一本の木だけを見とっちゃならん。それじゃあ山の仕事はできん。木を見るということは、そういうことだ」と。そして、私が思ったよりもかなり広い危険区域を示したのです。その意味はよく分りました。「木を見る」という意味ですね。

牛深で巾着船に乗せてもらったことがあります。巾着船というのは知っていますね。巾着船は夕方に港を出て、一晩中沖の漁場で操業して、朝方帰ってくる。その漁場に着くまでは暇です。だから沖に着くまでの間、ずうっといろんな話を聞いていました。そのとき、一人の船頭さんに「あんたは泳ぎきるか?」と尋ねられた。「はい、泳げます」「どれくらい泳げるか?」「スピードを言わないなら、どがしこでも（どれだけでも）泳ぎきります」と答えますと、その船頭さんが「すげーなー、あんた、泳げるとなー。この船のなかで泳ぎきつとは何人おるじゃろか?」と、変なことを言ったのです。「漁師のなかに泳ぎきらん人がいるのですか?」「おるよ。こん中にも泳げんもんがおる。俺も泳ぎは自信のなかばい…」 そんな問答をしているうちに、漁場に着くと、今までのゆったりしていた状況が一変して、戦場のようになりました。真っ暗い沖、灯船のライトを囲むようにして、網船がずうっと網を引いていく。それまで荒れてはいなかった海面が大きくうねりだす。いつの間に着替えていたのか、みんなゴムの作業着（首のところから足先までつながっている作業着）。掛け声に合わせてながら網を引き続けると、僚船が近くにくる。こっちの船も隣の船も大きく上下して、私は立っておれない。初めて見た漁師の仕事場。私は体全体がポーッとなくなっていました。明け方、港に帰るとき、まだポーッとしている私のところに、あの船頭さんがきて、こう言いました。「今日の沖は静かだったが、荒れるときには、網を引きながら海にほっぽりだされることもある。作業着を着たまま、荒波に落ちて泳げるものが、泳げる人ということだ」と。「あんたがごて（お前のように）、プールで浮かっとなんとは、泳ぎきるうちには入いらん」と言われたのには参ったけれども、そうだろうね。命懸けだから。これは「泳ぎの一人前」の話です。

あらゆる職業について、こうした「一人前」がありました。例えば大工さ

んの場合。子どもが弟子入りをする。初めのうちは、仕事はなににも教えないで、火をおこせ、湯をわかせ、竹輪をかうてこい、焼酎もってこい……そんなことしか言わないで、ある日突然「お前、ちょっとカンナかけてみらんかい」と言われる。で、その弟子がカンナをかける。カンナからでてきたカンナ屑を取り上げて、棟梁は「今まで何しよったか。カンナもわからんか」と突っぱねる。教えなかったんですね。見よう見まねということですね。弟子は一生懸命盗み見しながらカンナのかけ方を学んでいく。ある日、横目で仕事ぶりを見ていた棟梁が弟子のカンナ屑を手にしながらか、「お前のカンナも切れるようになった」と励ますのです。そして（これは、ある本で読んだんですが）、棟梁は、弟子のカンナ屑に「これはあなたの息子が削ったものです」と墨書して、弟子の親元へ届けたという話です。カンナが「一人前」に使えるようになったことを、親に知らせたんですね。

この席には女性が沢山いるから、「女の一人前」の話もしとかにやいかんね。私は、この学校にきてから10年間、いや15年くらいになるかなー、「教育社会学会」というのをやって、これまで話してきたような調査を、毎年の夏休みに学生と実施してきました。

ある年、女子学生が4～5人で「先生は、男ばかり連れて行くからけしからん」と押しかけてきました。「私のいくところは僻地ばかりだ。だから女はついて来れない。男しか頼りにならん」と言ったところ、彼女たちが怒った。そして「絶対にへこたれないから、私たちも連れて行ってくれ」とねばられた。ついに負けて、四人連れて行くことにしました。「ただし、約束がある。一週間、君たちには炊事当番をしてもらいたいが、できるだろうか?」「任せなさい」と言うから、それを条件にして、五木村の山奥調査に行きました。現地に着いたのが夕方でしたから、予約しておいたお寺のお堂を借りて、早速夕食の準備です。「飯の準備だ」と彼女たちに言ったら、「任してくれ」と。どこで仕入れたか知らんが、リュックから干鰯とか、カレーの素とかいっぱい取り出しながら、「今日は何にしましょうか」「カレーにしよう」「オーケー」、ということでスタートです。お寺から借りた五升炊きの釜

を渡したら、「先生、水加減がわからん。この釜には目盛のついとらんけん、どれぐらいすればよかでしょうか？」と言う。「ちょっと待った」と、私を手を突っ込んで、ガーッと混ぜて、「これぐらいでよかろう」と言うたところ、「何センチですか？」ときた。「何センチかは知らん、そんなのは勘だ。自分の手で、指の節で覚えなさい。急いで炊けよ」と言ってお堂に上がってしばらくしたら、堂のなかが煙でいっぱいになった。「先生、火のおこらん」と言うてきた。降りて見たところ、クド（クドというのを知っているかな、君たちは？）に焚き物をいっぱい詰め込んで、新聞紙を何枚も丸めて、マッチの小箱を半分ばかり使って、「ぜんぜん火がおこらん」と、クドが悪いかのよう言う。「カカトウジョウということを知ってるか？」と言うたら、「知らん」と、妙な顔をした。（このなかで知っている人、手を挙げてごらん。いないね）「夏下冬上」。火をおこすときは、夏は火種を下に、冬は火種を上におかないと火はおこらない。「ちょっとやってごらん」と、私は焚き物を半分ほど引き出し、燃えそうな小枝を差し、そして新聞を一枚丸めてマッチをつけたら、ボーと燃えだした。（これは、彼女たちが先に新聞紙いっぱい暖めていたから燃えやすくなっていたんだらうね）「あと頼んだぞ」と上がって、明日の計画を考えようとしたところで、「先生、ブツブツ吹き出した、お湯が吹き出す。どがんすつと（どうすれば）よかですか？」『初めチョロチョロ、中パッパ、赤子が泣くとも蓋とるな』と昔の人が言っている。石を拾ってきて、蓋の上に置きなさい。そして、火を引いて、オキビ（燠火）で炊きなさい」と指示した。（オキビとは？ 君たちは知らんだらうなあ。薪などの炎がおさまって、炭火のようになったもの）オキビはだんだん燃焼して白くなっていく。つまり余熱だな、そのオキビの余熱でご飯が蒸れるのを待つんだ。それまで蓋をとったら駄目だ。飯は、結局私が作ったことになる。「今晚はカレーと言いよったね。ならば、カレーを頼むよ。急いでくれ」「カレーは任せなさい」。これもお寺から借りた鍋でカレー作りが始まったが、「急いでくれ」と言われたからか、彼女たちは鍋をこういうふう（炎の強い部分を掩うように）火にかけたのです。これはいけません。「急がば遠火」と言っている。

急いで調理したいとき、熱を急いで加えたいときは、火から遠いところに鍋を置かにゃいかん。だから、これじゃいけない。こんな場合は、クドと鍋の間にダゴ石かなにかを置く。意味はわかるでしょう？ 風が前からこうくる、そしてクドと鍋の隙間に吹き上げる。こうして蓋してしまうように鍋を掛けると、風の通りが悪くなって、火が小さくなってしまう。「急がば遠火」とは、そんな意味なんです。こうして、カレーも私が作ったことになりました。「早よう食うぞ」と言って、お堂の前に蓆を敷いて食べ始めたら、流れ星がサーッと見えました。女の一人が言いました、「先生、こんなところで、流れ星を見ながら、自分たちで作ったご飯を食べるなんて、楽しいですね。ロマンチックですねえ」と。私は腹が立って仕方がありませんでした。「何ば言うかー。お前たちは急いで食うて、全員ここに来て座れ。俺は、もうイライラしてきた」と、みんなを集めて、次のような話をしました。

「昔、女は誰よりも早く起きて、火を熾して、ご飯とおかずを作ってから、夫と子どもを起こした。そして、みんなにお給仕しながら、自分も一緒に食い終えねばならなかった。今のように核家族ではなかったから、祖父母が同居している家では十人近かったろう。昔の農家は、わが家から田畑まではかなり距離があった。だから、昼の弁当の用意をして、熾した火に灰をかぶせて、夫と一緒に野良仕事に出かけた。一日働いて、仕事を終えたら、夫より一足先に帰ってきて、朝かぶせておいた灰を取り除き、新しい小枝（熊本弁ではビャラという）を加え、火吹き竹でフウッと吹くと、火がポッと燃える。そこにお湯をかけて、お湯が沸きだしたころ夫が帰ってくる。そこでお茶をいれて一日の労をねぎらう。これが“火の管理の能力”というものだ。この能力のない女は、嫁の資格がなかった」

そんな話をした後、私はつつい「君たちと結婚せんでよかったー」と言いました。そしたら四人組がすかさず「先生たちと時代が違ってよかったあー」と笑いました。私はムカムカして「どうして？」と聞きました。すると「先生の時代認識は間違っている。私たちが結婚して持つ所帯は、都市ガスかプロパンガスですよ。だから、現代女性の“火の管理の能力”という

のは、ガスコンロの操作ができて、メーターの針が読めて、光熱費の計算ができて……、それでいいじゃないですか」という返事が返ってきたのです。この話、諸君はどう思いますか？ あれから十数年、あの人たちは、ひょっとすると「今日はガスの出らんけん、飯はなかばい…」と言ひよるかもしれないなーと、思い出しました。君たちの時代では、今日の晩飯は、レンジの「チン」をセットできれば、それで「炊事的能力」ということになるのだろうか？ どうでしょうか？ これは宿題としましょう。

いろいろ話しましたが、要するに、抽象論ではなく、極めて具体的に、いわゆる計量的に、測定可能な物差しとして、「労働能力の一人前」の基準があり、それをパスすることが「おとなの条件」の一つだったということです。

もう一つの基準。ちょっと言葉がピシャッと当てはまらないけれども、「社会的能力」という言葉を使っておきましょう。こちらは、要するに、人間関係を維持していくのに必要なもの。言葉遣い、礼儀作法をはじめ、ものの見方、考え方、そういうものを含めて「社会的能力」です。それにも「一人前の基準」がありました。

例えば、私の母は大変古いタイプの女性でしたが、言葉遣いに厳しかった。小学校のころ、私が学校から帰ってくると、待ってましたとばかりに「今日は〇〇の日だけん、団子ば作った。この団子ば〇〇ばあさんのところに持っていってくれんかい」と言う。こっちは友達との約束もあって、早く遊びに行きたいので、ひったくるようにして行こうとすると、「待った」と言って、母は「何て言うのか？」と。「ばばさん、ダゴば持ってきたと言えよかる」と言うのと、「いかん」と言う。「今日はこうこういうことで、家で団子を作りましたから、持ってきました。食べて下さい、と挨拶せにゃならん。言うてみなさい」と命令。間違えんように反復できたところで、「よし、行ってきなさい」ということになる。走って帰って来て遊びに行こうとすると、「すまんけど、もう一軒、今度はあっちのじいさんの家に団子ば届けてー」と。手荒に引き取って行こうとすると、また「何て言うのか？」、「さっきの



「と言えばよかろー」と言うと、「違う、さっきはこうだったが、じいさんにはこう言わにゃいかんー」と、母はくどく要求しました。今でも忘れません。

ものの言い方、言葉遣いというのは、大変厳しかったんじゃないでしょうかね。お辞儀の仕方、座り方、茶碗や箸の持ち方、それに笑い方から歩き方まで、みんなパターン（型）があって、その型からはずれることを厳しく諷められました。もう昔のことになったろうか？ 君たちの記憶にはなかりませんが、NHKのドラマで「藍より青く」というのがありました。覚えていないでしょうね。天草、牛深のある村がモデルでしたが、戦時下の青年男女のひたむきな暮らしを描いた、すばらしいドラマでした。戦争に狩り出されていく青年、その恋人の純情、青年宿にたむろする青年群像……、私は引き込まれるように見続けました。が、どうも何か一つピンとこない。これほど良心的に地域の歴史や風俗を把握して書かれた脚本、すばらしい演技者たちが頑張っているのに、何かしっくりこないものがある。それは何故だろう？ ふと気付いたのですが、それは言葉でした。青年たちが寝泊りしている宿に、いつも出入りして世話してくれるお婆さんがいるのですが、そのお婆さんを、あのドラマでは「バアチャン」とよんでいる。これでした、しっくりこないのは。私が知っている天草弁では、村内の年取った女性に対する呼び掛けの言葉は五通りありました。「バサマ」「オババ」「バヤン」「バツバイ」「ババ」。これは差別です、差別用語です。家柄によって、お年寄りに呼び掛ける言葉を使い分けるといのは、今では考えられないことですが、前代までは、そんな言葉を身に付けるということも、ムラビトとして暮らしていく上では必要なことでした。言葉とともに、挨拶の仕方、「オババ」に向かったの挨拶と、「バツバイ」に対する挨拶は違いました。私は、あのドラマのモデルになった村の近くで教員生活を四年していましたから、家庭訪問などのとき、こうした呼称には大変神経を使いました。あの地域で、「バアチャン」というのは、古い時代にはなかったんだと思いますが、どうでしょうかー。

私は、こんな呼称の差別を是認しているのではありません。そういう日用



語の体系がある地域で生まれ、そこで育っていく子は、それを一日も早く身につけないと、「ものの言い方いっちょ(一つも)分からず、体ばかり太うなつて…」と非難されました。そんな社会では、敬語の使い方は勿論のこと、対話のなかに含まれている相手に対する感情や気配りや深切(親切)、モラルの感覚、そういうものを非常に細かく、また大事にしていたんじゃないか、と私は思うのです。言い方を替えるなら、「分別の分る人間」ということが「おとなの条件」だったんだと言ってもいいでしょう。「社会的能力」とはニュアンスが異なるようだけど、「分別」をわかまえるという能力、それも社会的な能力です。先に、ブーグレという人の「教育は文化の糸つなぎだ」という言葉を紹介しましたが、歴史を切断しないためにつながねばならないもの、その大事なものは集合感情というか、集合的価値観、そういうものだと思う。そして、その軸になるのが「分別」ということになるんじゃないだろうか。「分別」とは、経験を積んで人間としての道理をわかまえること、また、その能力のことですから。

ちょっと時間を取り過ぎました。なかなか教育のことまで近付きませんが、もう少し、話を続けます。

なぜ、どうしてこんな厳しい「一人前の条件」というようなものが、地域のすべてのものに要求されたのでしょうか？ 次はその問題ですね。

ここに「一人前」という線がある。つまりこの線が子育ての目標ですね。その線の向こうに「おとな」がいて、育ってくる子どもたちを見ている。幼児→少年→青年と育ってきます。一人一人の成長ぶりを、こっち側の「おとな」が見ていて、その線にまできた(成長した)青年に、「この子は、もう一人前になったようだ」という見定めができれば、「そろそろ所帯持たせてよかろう」「そろそろ結婚せんかい」ということになるわけです。若者は周りの「おとな」たちに祝福されながら、この線を越えて「おとな」の仲間入り、ということになるわけですね。

この「一人前の条件」というのは、非常に厳しい条件でした。誰でも、年

をとれば自然に身につくというようなものではなく、努力しないと届かないという、高い条件（水準）でした。だから、（男の場合）15歳になると「若者組」に入って、そこで、夜、宿に寝泊りしながら、自分たちの間で自主的に（先輩が後輩に一つずつ）教えていったんです。つまり、「若者組」は、一人前になるための最後の訓練期間（機関）だったわけです。（女性の場合は、「娘組」とか「処女会」というものがありました。「若者組」とは性格が違いますが、ここでは省略します）「若者組」は、親元を離れて合宿したり、厳しい掟があったりする、若者だけの自治的な集団活動でしたから、その前段階として、集団行動や集団活動の基礎・基本を身に付ける場として「子ども組」がありました。つまり、「子ども組」は、「若者組」での「一人前」への訓練に参加するためのレディネスを培うところだったわけです。「子ども組」には7歳ぐらいから加入しましたので、それより幼いものたちは、家族のなかで日常生活の基本を仕付けられたのでした。

こういうふうに見てくると、「おとな」→青年→少年→幼児とつながるでしょう。では、何故そういうふうに関わり合ってきたのか、という問題になります。私は、それを「モロナンギ（諸難儀）」という言葉で考えてきました。今もそう思っています。「諸難儀」？ もうこの言葉は使われていません。死語になったようです。私が最初にこの言葉を聞いたのは、天草の牛深でしたが、もう、そうですね、30年くらい前になるでしょうか。

「諸難儀せんごと」「諸難儀じゃっかー」というような言い方をして、村の人たちは、一緒に難儀することを大きな問題としたのです。例えばね、台風がくるでしょう。すると、屋根瓦がとぶ、そうすると、村中の働き手が一軒から一人ずつ出ていって、壊れた屋根に上って、ある者は竹組を直す、ある者は藁を束ねる、ある者は重しで補強する、全員総掛かりで、壊れた家の修理をしたんですね。洪水で橋が流される、石垣が崩れる。そんな時、こんな大きな石を動かしたり、移動させたりという作業になるんだが、その作業をやり遂げるためには、作業に加わったすべての人が、石というものの性質についての理解、石の動かし方のコツ、そういうものをもっていなければ、い

わゆる合力、力を合わせて問題を処理することができなかったんですね。ある人が亡くなる、誰かがお寺に走る、ある人は村内に知らせてまわる、ある人は棺桶の用意をする、ご婦人たちは弔いのための食事を作る、野辺の送りの段取りもある……、そういう仕事を手分けしてしなければならんというとき、「私は出来ません」じゃいかんでしょう。そんな人が一人でもいたら、村の暮らしは成り立たんでしょう。今のように、電話一本すれば修繕屋さんや葬儀屋さんが来てくれるんじゃないかなかったです。

みんなが持っている能力（知識・技能・特技）を持ち寄って、全部合力して、それによって、自分たちの生活を維持していく、地域生活の破壊を防衛していく、そういう考え方、思想ですね。誰か一人でも難儀しているものがあれば、みんなが、その難儀を自分の難儀だと受け止め、一軒でも難儀している家があれば、それを地域全体の難儀だと感受する。そして、そんな難儀を解消するために、みんなが知恵と力を出し合う。そんな発想……すばらしいじゃないですか。

村には「クヤク」という行事がありました。（今でもやってるところはあります）自分の家に直接関わることじゃないのに、朝から駆り出されて、きたわれて、くたびれて夕方帰ってくる。だから「苦役」と書く。「苦役」じゃないよ、「公役」だよ。「公」の仕事だ。なにが「公」か？ 地域協同の生活が「公」。その地域協同の生活に役に立つ最小限の能力が「一人前」の能力。その能力をみんなに要求した。それがないと生活が壊れるからです。厳しい自然条件と対決しながら、貧しく弱い人々が、知恵と力を出し合って、それによって生活を守っていく。そんな暮らしの仕組みがあったのではなかったか。その一番基底にある考え方を、私は「諸難儀」という言葉で理解したのです。ここまで、いいでしょうか？

今でも忘れません。天草のある村の青年団の日誌を調べていた時のことです。昔（戦前）区長をしておられた人と一緒に読んだんですが、こんなことが記録されていたんです。

昭和17年。戦争の真っ只中。国から県へ、県から村へ命令が出された。

「鉱山報国隊」の動員で、戦力強化のための労働力補強要員として、青年を一人、炭鉱に派遣せよという命令だった。戦争のための石炭掘りに狩り出されるのだが、行ったら一年は帰ってこれない。栄養失調で倒れるかもしれない。過労で死ぬかもしれない。誰も希望して行く者はおらん。国の命令だから仕方がない。その青年団では籤引きで選ぶことになった。日誌によると、全団員が集まって籤を引いたところ、報国隊に行くのは〇〇君に決まった、と書いたところを筆でバツ（×）として「籤をやり直して△△君に変更」と訂正してあった。その数日後には、△△君を見送ったとも書いてあった。一緒に読んでいた元区長さんに「これはどういうことですか？」と尋ねたところ、「モロナンギじゃせんか（諸難儀ということではないでしょうか）」と答えられた。元区長さんの話によると、最初に籤に当たった青年は、父親が若くて死亡、病弱な母親と二人の母子家庭。本人は郵便局の集配人として働き、一家を支えていた。その彼が籤に当たって出て行けばどうなるか、青年たちはみんな知っている。だから、彼に当たった瞬間、「しも一た（しまった）」とみんなの顔がゆがんだ。そこで団長が、「やりなおし。今の籤は間違うとったけん、もう一遍引いてくれ」といって、やり直した結果、△△君に決まったというのでした。

旅行に行くんじゃないよ。炭鉱の地の底に行くんだよ。一度は自分ではなかったのに、やり直して自分が行かねばならんことになった△△君。行かずに済んだ〇〇君もつらかったろうね。それでも、その場がよく治まったもんだね、治めたんだね。元区長さんの「諸難儀じゃせんか」という説明がよかった。よかったと言うと変だが、私はその一言を飲み込んだんです。わかるだろう、諸難儀？

誰か難儀している人があれば、その難儀を自分にも関わる難儀だと受け止める感受性。私は能力だと思う。一軒でも難儀している家があれば、地域全部のものがその難儀を引き受けて、それに立ち向かい、解決していこうという発想、姿勢、そういう諸難儀の思想というものがあり、その具体的な表現が「一人前の基準」じゃなかったか……そういうふうに、私は思います。君

たちの感想が聞きたいね。

諸難儀の世界に受け入れられ、一人前の地域人として暮らしていくのが「おとな」。その「おとな」の仲間入りをするための訓練期間が青年期。頼もしい青年に育つための基礎作りが少年期。成長して集団生活に入っていけるような基本的な習慣をはぐくむのが幼児期。こうした一連の子育ての方法が「シツケ」です。「躾」? こんな字を使うと間違うよ。漢和辞典を引いてごらん。「躾」の字は国字(和製漢字)とあって、意味は書いてない。身偏に美しいと書いて「シツケ」と読ませるなら、身体を美しく飾るもの、その美の基準がなければなるまいと思うが、これは余談。

「シツケ」は「仕付け」です。洋服や着物の仕立てのときに「シツケ糸」というのを使いますが、これが「仕付け」ですね。この糸の付いたままの着物を着て歩いていると笑われるけど、何故笑われるか? 田植えのときに「シツケ縄」というのがあったけど(今は機械まかせで、こんなものは見ようともしても見れないが)、これも語源は同じ。型にはめるといことです。

子どもを仕付けるというときの「シツケ」も同じです。型にはめることです。何の型か、生活の型です。生活の型とはなにか、先輩たちがこれまでずうっと守り伝えてきた生活の型、つまり「シキタリ」です。「シキタリ」ってどう書きますか? 「仕来り」ですね。してきた通り、親がしてきた通り、先輩がしてきた通りという意味です。

ここで生活の型といっているのは、身のこなし方とか作業の仕方ばかりじゃないよ。ものの見方、考え方、判断の仕方、これらをみんな含めて生活の型と言っているのです。生活の型=仕来り=常識と言って良いでしょう。子どもたちは、それぞれの成長過程で、起居動作、立ち居振る舞いばかりじゃなく、生活感情や倫理感を、常識として体得することが期待されたのです。その常識の核心というか、基底にあるものというか、それこそ「諸難儀のわかる人間」ということではなかったろうか…、私はそう考えます。

「型にはめる」というと、子どもの主体性を無視した「押しつけ」のように

受け取られそうですが、そうではありません。むしろ、現在の教育荒廃の原因の一つとして、生活の型が壊れてしまったということがあるんじゃないかと考えていますが、ここでは、その問題には深入りしません。宿題にしとしましょうか。

「仕付け」の教育で注目したいのは、幼児、少年、青年に対する「仕付け」を通して、「したいからする」「したくないからしない」という世界とは別に、したくなくても「しなければならぬ」、したくても「してはならぬ」という世界があることに気付かせていったということです。祖父母の時代の教育（「仕付け」）の仕組みの、一番すばらしい点は、そこだと思います。「こうしなさい、あーしなさい」「こうしちゃいかん、あーしちゃいかん」と言わずに、座り方、笑い方、泣き方……こんなことを、「仕付け」という方法で、自然に気付かせていく、分らせていく。教導という言葉があるけれども、覚醒といった方がいいかも知れませんね。「したいからする」「したくないからしない」ということだけでは、人間は生きていけないんだということを、世間（世の中）はそうはなっていないということを、小さいときから分らせていく、「それが生活の秩序だ」ということを自覚させていく。そこでは、日常生活の秩序がイコール教育の秩序でもあった。私は、このことを「義」の世界という言葉で言ってみたいのです。後で触れます。

君たちを見ていると、「大昔のことばかり言いよる」という顔ばしとるから、これから「今」の話をしましょう。

これまで話してきたことは、この村で生まれて、ここで育って、ここで親の仕事を受け継いで、ここで結婚して、ここで死んでいくという生活。隣も、その隣も同じような類型的な仕事（暮らし）をしている。だから、一つの物差しで「一人前」とか「一人前じゃない」とか計れたんだ、「今は違う」と君たちは言う。私もそう思う。当たり前のことだ。

社会変動の急速な展開のなかで、それまで自足的な生活をしてきた地域共同体は壊れた。だから、その地域を単位にしまった「一人前の基準」も壊れ

た。これは当たり前のもので、いわば時代的必然というものでしょう。だけど、さっきからこだわってきたように、幼児を少年に、少年を青年に育て、そして青年を次代の「おとな」にまで引き上げていくことが教育の仕事だとするならば、やっぱり「おとなの条件」ということは問題にしなければならん。そうは思わないか？ 社会の変動によって、それまでの「一人前の基準」は、もう役立たんごとなったというのが、役立たんごとなった（壊れてしまった）と言うことと、そんな基準はいらんごとなったということは違う。祖父母の時代の「一人前の基準」では計られん世の中が来たんだというのが、そんな「基準」はいらんような時代になった、と言うことではあるまい。「基準」を立てることが難しくなったということと、不要になったということとは違う。教育を考える以上は、いかなる時代、いかなる社会であっても、「おとな」の基準というのが必要だ、と私は思う。今の時代は、熊本で生まれたものが東京にいて、東京で所帯をもって帰ってこない。親は農業だったが、息子は役場のサラリーマンというのが普通になった。だから、親と子どもの物差しは違う、そういう時代だ。それはそうだ。だけど、重ねて言うけれども、難しくなったことと、不必要になったこととは違う。だからどうしたかー。基準を変えました。

プリントにも書いておきました。二つです。一つは、どんな職業の人にも、どこに住んでいる人にも当てはまるような基準にした。これを一応「標準化」あるいは「平準化」としましょう。その典型は？ 年齢です。酒や煙草は二十歳から、アダルト映画は18歳から、参政権は二十歳。結婚できる年齢は男18歳、女は16歳。そんなことをキチンとするために、法律で定めてある。法定年齢といいますね。もっとも典型的なのが「成人の日」。「成人の日」は、昭和23年に「国民の祝日に関する法律」で決められたものですが、その意義はこう書いてあります。「大人になったことを自覚し、自ら生き抜こうとする青年を祝い励ます記念の日」。これでいくと、 $365 \times 20$ 、カレンダーを20年分消したものは「大人」ということになるんでしょうかね。（私は「おとな」と「大人」を区別して話をしています。念のため）



どうだろうか。可婚年齢、結婚してよい年齢。男は18歳、女は16歳と法律で決めたということは、身体的に成熟した年齢と法で保証したということですよ。だから結婚する。結婚すれば夫になり妻になる。ここまでは動物も一緒に、オスとメスの話。だけど、結婚したら子どもが生まれる。子どもが生まれたら、男は父親に、女は母親になる。父親・母親という関係、これはオス・メスの関係とは次元の違う概念である。じゃないでしょうか。ときどきニュースになりますが、車でパチンコに行った夫婦が、わが子を駐車場の車の中に閉じ込めていて死亡させたということ。こんな人に父親・母親の資格がありますか？ 自分が生んだ子を、人間らしく育てていく能力がないなら、父親と言っちゃいかん、母親と言っちゃいかんでしょ。

年齢で線引きして、これから上は大人、下は大人じゃないという手続き。これを基準の平準化と言っておきますが、これでいいんでしょうか？ ここで考えたいことは、基準の平準化のなかでは、「能力」の問題が欠落しているということです。かつて、「一人前の基準」がはっきりしていた時代の物差しは「能力」論でした。社会変動によって改訂された基準は、能力論を落とした。これが一つです。ちょっと名前を思い出させませんが、今年の何処かの成人式に記念講演を頼まれた著名人が、会場のあまりの騒々しき、「二十歳」の青年たちの異様さに腹立てて帰ってしまった、という新聞記事があったね、読みましたか？ 二十歳になって「成人」にはなったけれど、「おとな」にはなっていなかった連中ということでしょうかね。

基準の改訂のもう一つ。これは「能力」論です。「おとなの条件」として、能力の問題とは関わない年齢のような基準ではなく、「仕来り」の時代の能力とは異質の能力を持ち込んできました。これをリテラシー (literacy) という言葉で考えてみましょう。

リテラシー。この言葉が使われだしてから久しくなりますが、以前は識字能力と訳され、「読み書き算盤」ができるかどうかということでした。祖父母の時代までは、「読み書き算盤」ができない人もおりましたが、日常生活



のなかに、科学的な知識や技術がどんどん浸透してくると、「読み書き算盤」のレベルも高くなってきます。そのことは、小学校の昔の教科書と今の教科書を比べてみれば分ります。いま要求されているリテラシーのレベルがどれぐらいか、小・中学校の教科書を見てごらん。義務教育のレベルはOKだとして、それなら、高校の教育内容はどうか？ 「仕来り」の時代には、その生活のなかに型として組み込まれていた能力、それを継承して身につけていけば、それでよかった。ところが、科学的な知識や技術が、日常生活のあらゆる領域に入ってきて、それなしには生活をエンジョイできない、そういう状況になりました。だから、リテラシーのレベルもどんどん上ったし、幅も広がった。そこで、小学校や中学校の教育も大変難しくなった。高度になった。いわゆるミニマム・エッセンシャルズ (minimum essentials) というのが、ややこしく複雑に膨れ上がってきたんです。

これは余談だけど、君たちが教員になったら、こんなことを言うてくる生徒がいるだろう。あるいは、君たち自身がそんな子どもだったかも知れんかね。「先生、サイン・コサイン・タンゼントはどうして勉強せにゃならないですか？ 僕は難しか数学なんか要らん仕事ばしろうと思っとりますか？」「なんで英語ばせにゃいかんとですか？ 私は外国人は好かんです」…「それでも勉強せにゃいかんぞ」と説得できますか？

話を戻します。私たちは、自分の興味や関心に従って職業を選び、自分の人生設計を組み立てることができる時代に生きています。祖父母の時代とはまったく違いますが、それでも、「おとな」として仕事に専念し、子どもを生育していくのに、能力が問われることは同じです。ただ、当然のことながら、問われる能力の中身が違います。その、現代社会で問われる能力はファンクショナル・リテラシー (functional literacy) といわれるものでしょうか。ある本では「機能的識字能力」と訳してありますが、それじゃあ分かりにくい。ファンクション、ファンクショナルという語には、職業上の、職能上のという意味があります。いろんな職業の選択が許される時代に、一つの職業

を選べば、その職業上必要とされる知識や技術というものが問題になります。それがファンクショナル・リテラシーです。職業が違えば、その職業で最低必要とされるリテラシーがある。そういう意味で、このファンクショナル・リテラシーを、私は、現代の「一人前の基準」に置き換えて考えてみたいのですが、那样的外れなことじゃないでしょう。

一昔前までは、学生諸君が職場訪問すると、「あなたは自動車の免許を持っていますか？」というのが、一つの関門だった。「自動車の運転ができませんは、うちでは雇えません」。しかし、今は違うよね。「あなたはコンピューターはできますか？」「プログラミングはできますか？」ですね。

最近では、メディア・リテラシー (media literacy) という言葉が使われます。情報化社会を生きていくためには、基礎の基礎としてPC・リテラシー、つまり、パソコンの操作ができなければ駄目だということで、高校でも、パソコンが必修化されるという状況です。PC・リテラシーの次には（その上に）、ネットワーク・リテラシー (network literacy) が要求される。次々にレベルアップしていったって、君たちも大変だ。私は、学内ランも利用できないから、まずは失格だね。

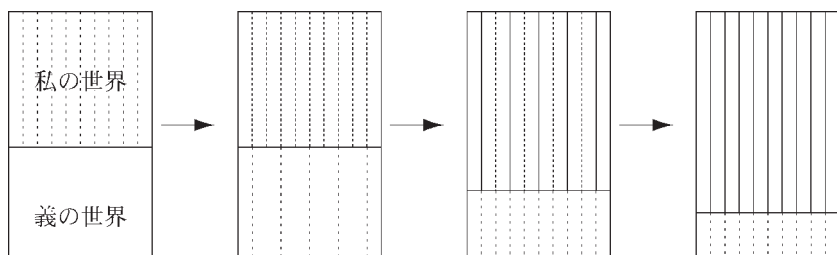
私は、こうした状況を、基準の多様化というふうに考えました。世の中の変化で、古い時代の「一人前」は壊れた。だが、やっぱり能力という物差しがいる。誰でも、どんな職業の人でも、どこに住んでいる人でも、「標準化」や「平準化」といって、年齢をもってきたりして、一様に括ってしまうのは無理だ。ということで、リテラシーという尺度をもってきた。これが基準の多様化で、これなら、職種ごとに「あなたは～ができますか？」と問えるだろう。

しかし、ここで問題。今は、まさに日進月歩という技術革新の時代です。君たちが大学で学んだ知識や技術、例えばメディア・リテラシー。これは、卒業したらすぐ、あっさりと陳腐化します。ここで学んだPC・リテラシーは、就職先の職場では役立ちません。そうでしょう？ それが常識だとするならば、リテラシーという観点から「一人前」の問題を考えていく場合に、もう

一つ、検討しなければならないことがあります。大学で学んだ、習得した知識や技術のレベルが問題なんじゃないということ。そのレベルは、おそらく卒業後すぐに役立たなくなる。とすれば、大学で学ぶことはなんなのか？これは宿題にしたいんですが、考えるヒントだけを言いましょう。高卒より大卒がいいというのは、高校のレベルより、大学で学んだ知識のレベルが高いからじゃない。勉強した結果としての知識や技術のレベルを競うのではありません。学び方、考え方、情報収集の仕方、情報整理の仕方のレベルが問われるべき問題になるんじゃないだろうか。このことは、学ぶ側だけの問題ではありません。学校教育の在り方の根本にも関わってくる重要な課題だと、私は考えていますが、これから先は宿題です。

社会の変化に伴って「一人前の基準」を組み替えた。そのうち、労働能力に関する「一人前」については、いま言ったような発想で、リテラシーという概念を持ち込むことで、何とか分かりそうな気がします。だけど、私たちとして、反省というか、問い返さなければならないことがあります。労働能力の「一人前の基準」が、暮らしの変化と共に、地域を離れて全社会的に広がっていった（それは社会的な必然として理解するけれども）それと同時に、社会的能力の基準も、なし崩しに風化させてしまった。これは、私たちの失敗、誤りじゃなかったか、と私は思うのです。労働能力と社会的能力、この二つは切り離せないという考え方があるかもしれません。しかし、あえて、切り離して考えてみたいのです。

さきほど私は、子どもたちを「したい、したくない」という世界から「し



てはならない、しなければならない」という世界へ目覚めさせていく「シツケ」のことを取り上げました。大雑把に図示しましょう。

「したい、したくない」という世界を「私」の世界としましょう。「してはならない、しなければならない」という世界を「義」の世界としましょう。以前の子供たちは、「義」の世界を共通に持ちながら、その上で、自分の好みとか趣味とか能力とかに個性を出していた。昔の人たちは、個性とか個人の特徴とかを無視されていたんじゃないかというのが、そうではないよ。むしろ今よりも細かく、地域の人々は子どもを見つめていた。この子は利発な子だ、あの子は機敏な子だ、器用な子だ、素直な子だ、おっとりした子だ、繊細な子だ、優しい子だというように、かつては、子供たちを「地域の子」として育てようという発想だったから、地域みんなが、他人の子をそういう目で見ていた。それが一番左の図の点線のところです。その子がもっている素質、いい面を、みんなで伸ばしてやろうとしたんだが、しかし、どんな子にも共通に「してはならない、しなければならない」という「義」の世界があるのだということを、はっきりと認識させたんですね。「義理」という言葉がありますが、これは人間関係の中で守らなければならない道。それも含んで「義」は、人として当然しなければならない道。社会生活の変容を図示すると、まず、「義理」、つまり人間関係、他人と自分との関わりが軽視されるようになり、自分の私的世界だけを大事にするようになった。それによって「義」の世界がだんだん小さくなってきた。この傾向はこれからも止まらないだろうが、「義」の世界が消えてなくなるということ考えられません。消してはなりません。

最近、盛んに教育の個性化、多様化、あるいは個性重視の教育ということが言われています。そんなときの合い言葉は価値観の多様化です。価値観の多様化？ わかるような、わからないような、なにか仕掛けのある（惑わされそうな）言葉です。

キンビールがいいかアサヒビールがいいか、「一番搾り」と「純生」はどっちが美味しいか？ どっちでもいいじゃないですか。なぜか？ 好みの話

だからです。好みや趣味のことならそれでいい。しかし、テレビを見てごらん。アフリカの難民が大きな荷物を頭にのせて、栄養失調でよたよたしている子どもを引っ張って、炎熱の砂漠を避難しているニュースがあると、パッと画面が変わって、「サーラリトシタ梅酒」。コロンビアの大地震で、飢えた子どもたちがマーケットを打ち破って略奪している、その場面が生々しく放映されたすぐ後に、「エバラ 焼き肉のタレ」。これは価値観の多様化ではない。キリンかアサヒかは、価値観（感）の多様化でいいだろう。しかし、これは多様化ではあるまい。多様化ではなくて、価値基準の崩壊、価値体系の崩壊というものだ。私たちが追わねばならない価値には、大きな価値、中ぐらの価値、小さい価値、どうでもいい価値、そんな順序というか序列があるはずだ。それをばらばらに壊してしもうて価値の多様化というのは、私には納得できません。ここにも、「私」の世界に浸食されていく「義」の世界という状況が見えませんか？

どんな職業に就こうとも、どこに住もうとも、人間として最低限要請される社会の仕組みについての理解、人間関係をスムーズに維持していくために必要なモラル感覚、判断力、責任能力……そんな社会的能力を（こんな用語があるかどうか知りませんが）ソーシャル・リテラシー（social literacy）という言葉で考えているところです。「義」の世界の復権が喫緊の課題となっている今、私たちは、要請されるソーシャル・リテラシーの問題を真剣に論議しなければなりません。

最後になります。いろいろ話をしてきましたが、要するに「人は連帯なしには生きていけないのだ」という常識を確認したい。いかに価値観の多様化といえども、「私」の世界がすべてを律してしまう社会はおかしい。そのおかしき、不気味さに気付くこと、それを自分の問題としてこだわり続けることが、今の「おとな」の最低必要条件だと思います。

授業では触れなかったデュルケームという人の教育についての考えを、最後に持ってきました。教育については、いろんな人が定義めいたことを言っ

ています。「教育とは、子どもが持っている能力を引き出してやること」だとか、「子どもの全面発達を援助してやること」だとか、いろいろあります。そうに違いありません。が、私は社会学に関心がありましたから、このデュルケームの定義が一番ストレートに分かります。彼は「教育とは、成人世代の若い世代に対する方法的社会化である」と言うのです。その原文は、プリントにあります。「教育とは、全体としての政治社会と子どもが特に予定されている特殊的環境とが、子どもに対して要求する一定数の身体的、知的および道徳的状态を子どもの内部に生ぜしめ発達させることを目的として、成人の世代によって、まだ社会生活に習熟していない世代の上に及ぼされる作用である。」(『教育と社会学』 誠信書房)

翻訳だから分かりにくい文章ですが、私は、これを次のように拡大解釈したい。つまり、「教師は成人世代に属するもの」、あるいは「教師が行う教育活動は、成人世代に足場をおいて、そこから若い世代に対して行われるもの」だと。さらに拡大解釈して、ちょっと強引に、論争的に言うなら、「だから教師は『おとな』でなければならない」ということになります。たとえ青年教師といえども、「結婚したらんから、俺は青年教師だ」と言っても、その言動はあくまでも、成人世代の側に立つものであって、その言動には、成人としての責任を持たねばならない、そういうふうに思います。諸君には、あるいは異論があるかもしれませんが、デュルケームの定義を、私はそういうふうに理解します。だから、教職を目指している諸君は、「おとなとは何か」「現代社会における『おとなの条件』とは何か」を、問い続けていかねばならないと思うのです。

現代は飽食の時代だから、難儀はないという人がもしいるなら、馬鹿だと言いたい。祖父母の時代の難儀は、貧しさと病氣と災害だった。それに戦争があった。いわば、タンジブル (tangible) な、目に見えやすい難儀だった。だけど、現代社会は、大変複雑な、見えにくい難儀を背負い込んだ。生活の便利さや快適さを手に入れた代償として、何かを手放した、切り捨てた。そして、複雑な難儀を背負い込んだ。今は難儀でいっぱいのおとなの世の中なのだ。極

端に言うなら、その難儀が見える人でなければ、教職についてはいけないんじゃないかー。

教師がしなければならん仕事の一つは、子供たちに、この見え難くなった難儀を、現代難儀の構造を、分かりやすく、見えやすいものに解説してやらねばならんことだと思う。難儀の真っ只中に生きているんだよ、ということ、を、いろんな機会をとらえて、子どもたちに意識させ考えさせていくこと、そういう仕事は、「おとな」としての教師には課せられていると思う。「教育の荒廃」といわれる昨今の事態は、子どもと親と教師の、まさに「諸」難儀ではないだろうか。

ユネスコのフォール委員会報告書（プリントを見てください）では、「To Have」の学習（教育）から「To Be」の学習（教育）への転換ということを提唱しています。これまでの学習（教育）は「To Have」、つまり物的な豊かさ、物的な幸福を目指す教育であったが、これからは「To Be」の学習（教育）でなければならない。「To Be」の学習（教育）とは、人間そのもの、人間としての精神的な安定、心の豊かさを目指す教育ということです。その通りだと思いますが、「連帯なしには生きていけない」という常識、その常識の根底には「諸難儀」という発想がなければならないのではないか、それが「To Be」の教育の原点だろう、と考えるのです。

ちょうど時間になりました。これから三月までは、学校に出てきますが、四月からは家にいます。教職履修の諸君が、「おとな」になっていく姿を、学校の外から見つめていきたいと思っています。

それじゃ、これで終わります。頑張ってください。

本稿は、平成11年2月6日の教職課程履修学生に対する「教育実習指導」で行った最終講義のテープをおこしたものである。口語調のため（方言も含めて）分りにくい箇所があると思われるが、修正や補正は最小限に止どめた。